

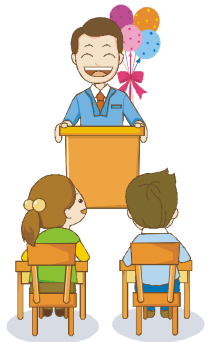
年度当初にあたって ~ 4月23日(土)PTA総会での学校長の話から ~



学校長あいさつ

屋代小の学校目標「豊かな心を持ち、たくましく生きる屋代の子ども」を育てるため、合い言葉を「笑顔いっぱい屋代小」とし、職員も児童も一丸となって取り組んでいます。

県教育委員会では、長野県教育の重要課題として、「学力向上」「不登校対策」「体力向上」の3つをあげて、取組をすすめています。



学力向上では、本校の本年度の重点目標の一つとして「友達の名前がたくさん出てくる授業づくり」を掲げ、先生方とよりよい授業を創り上げます。

「さんの意見に付け足して」「さんの意見をもう少し詳しく言うと」等々、一人に一つの大事な名前がたくさん出てくる授業づくりをすすめます。このことは、私の意見を聴いてくれる仲間がいて、私の大事な名前を言ってくれ、あなたの意見を聴いたよと、思いを伝えてくれるということです。私が、授業の中で、学級の中で、大事にされていることの実感を大きくすることにより、学習意欲が増し、学力向上につながります。また、家庭でできる学力向上は、まずは「読書」です。わずかな時間でよいですから、お子さんと一緒に本を読む時間、同じ本を読む時間の確保をお願いします。

不登校対策、私はこの言葉は好きではありません。私としては「楽しい学校づくり」です。学力向上をすすめる中で、心地よい「分かった・できた」授業を実現することにより、楽しい学級・学校がつくれ、不登校もなくなると考えています。

体力向上につきましては、学校では「マラソン」を中心に取り組みます。耐震工事が終わり、マラソンコース(1周 500 ㍎)が使えるようになりました。しかし、1日中学年で3周以上は走らないこととなっています。校庭や体育館で遊べる時は思いっきり遊ぶことで、体力づくりを進めます。私も始めました。子どもたちと一緒に走り、一応18周までできました。家庭での体力向上は、保護者の皆さんと一緒に「身体を動かす」楽しい時間をつくってください。



学校と家庭の真ん中にいる子どもを、「学校職員」と「保護者の皆さん」の信頼の輪の中で育ててまいります。この輪に、「地域の皆さん」を加え、ともに歩んでいきたいと思います。



PTA役員の紹介

当日、PTAの呼びかけで、募金箱に19,053円の義援金が集まりました。信濃毎日新聞社東日本大震災義援金に寄付させていただきました。ご協力に心より感謝いたします。

命を大切にし精一杯生きる（校長講話4月27日（水））

今日は「命を大切に」というお話をします。

はじめに、小学校4年生の詩（右）を読みます。

宮越由貴奈さんは重い病気で、長く病院に入院していました。病院で電池を使った理科の勉強をして、その後、この「命」の詩を書きました。それから4か月後の平成10年6月、わずか11歳で亡くなりました。子どもにかかる“小児がん”という病気でした。

おばあちゃんに「せっかくのいい詩だから何か絵をかいてみたら」と言われ、その気になってかいたのが、この絵だそうです。宮越さんの育ったところは、長野県の富士見町。富士山とスズランの花をかいたつもりです。うまくかけなかったと思ったのですが、このころはもうかき直す気力もなく、そのままおばあちゃんにあげたそうです。宮越さんは精一杯生きたのですが、11歳で命が燃え尽きて亡くなりました。

3月11日に起きた東日本大震災では、たくさんの子どもたちが亡くなりました。津波にさらわれ、行方の分からない小学生もいます。お父さん、お母さんが亡くなってしまったという小学生もいます。しかし、その被災地にも春が訪れ、瓦礫の間から、生き残ったサクラが咲きました。友達を失った子どもたちが、両親を失った子どもたちが、そのサクラに元気と勇気もらい、新学期を迎えている姿をテレビで見ました。

屋代小の皆さんは、今生きていることが当たり前ですが、当たり前でない人がいるのです。学校に



被災地に咲くサクラ


行けるということ。

友達と元気に遊べるということ。家族と毎日一緒にいられるということ。本当は全部当たり前ではありません。

命を大切にし、11歳でなくなった宮越由貴奈さんや津波で亡くなった子どもたちの分まで、将来の夢や目標を持って、精一杯生きてほしいと願っています。



「命」 宮越由貴奈（小4）

命はとても大切だ
人間がいきるための電池みたいだ
でも電池はいつか切れる
命はいつかなくなる
電池はすぐにとりかえられるけど
命はそう簡単にとりかえられない
何年も何年も
月日がたってやっと 
神さまから与えられるものだ
命がないと人間は生きられない
でも「命なんかいらない」
と言って
命をむだにする人もいる
まだたくさんの命つかえるのに
そんな人を見ると悲しくなる
命は休むことなく働いているのに
だから、私は命が疲れたと言うまで
せいいっぱい生きよう